野田九浦 —〈自然〉なること—

4月16日[土]－6月5日[日](休館日 4月27日[水]・5月25日[水])

開館時間|10時00分—19時30分　入館料|300円(中高生100円、小学生以下・65歳以上・障がい者の方は無料)

主催|武蔵野市立吉祥寺美術館

野田九浦(のだ・きゅうほ 1879–1971)は武蔵野市ゆかりの日本画家です。

幼少期から絵画に秀でた九浦は、10代半ばで日本画家の寺崎廣業(1866–1919)に入門、その後東京美術学校に進学します。同校中退後は日本美術院で研鑽を積むかたわら、正岡子規(1867–1902)に俳句を学び、白馬会洋画研究所に通ってデッサンの指導をうけたほか、留学を目指して英語やフランス語の習得にも励みました。

九浦の中心的主題は画業の最初期から一貫して歴史人物ですが、彼が、子規の自然主義芸術論に触れたことが画業の大きな転機になったと語っているのは注目に値します。当時の新たな日本画の画風として〈朦朧(もうろう)体〉がありましたが、九浦は伝統的な描法をまもり、線を埋没させることはしませんでした。そうした彼の描写は一見古風で、華飾なく淡々とした表現のうちに強烈な個の表出はみえません。しかし、その清明な画面と静かに向きあえば、個という狭小な境域を超えた全体—自然、あるいは宇宙—のひろがりが実感されます。九浦が大切に描いた線には、彼が子規から体得し、みずからのうちに昇華させた自然主義が集約しているといえるのではないでしょうか。

博識で知られた九浦は評論や随筆を数多くのこしており、古画や歴史に学ぶのみならず、日本画の将来にも常に意識を向けていました。彼の画塾は吉岡堅二(1906–1990)や鈴木朱雀(1891–1972)、東原徹(1917–2008)といった独自色ある作家を輩出しましたが、それは九浦が先見性と懐の深さを具えていたことの証左でもあります。

武蔵野市、こと吉祥寺地域には古くから多くの文化人が集い、多様な個が大らかに受容されてきました。50年近くを吉祥寺で過ごした野田九浦は、こうした地域性を、まさに自ずから然るべく体現していたともいえるでしょう。

2021年11月、九浦は没後50年をむかえました。そして、2022年は吉祥寺美術館開館20年の節目にあたります。武蔵野市史を振り返れば、美術館構想の端緒となったのは野田九浦の作品群でした。九浦の存在によって吉祥寺美術館の現在があるといっても過言ではありません。

このたび、武蔵野市が所蔵する作品より約20点を関連資料とあわせて展観、"歴史人物画の名手"という側面にとどまらない九浦の魅力をご紹介します。稀なる日本画家・野田九浦の仕事に触れるとともに、この時代を生きる私たちの在りようを見つめ直す機会となることを願っています。

[関連イベント]　＊いずれも参加無料

01　特別講演「野田九浦の芸術—歴史・旅・人」

講師：田中 純一朗 氏(宮内庁三の丸尚蔵館 研究員)
日時：4月17日[日] 14:00–15:00
会場：吉祥寺美術館 音楽室
定員：40名(予約不要・要入館)

02　〈九浦の家〉見学会

解説：青木 一郎 氏(能楽師、吉祥寺東コミュニティー協議会代表)
日時：①5月7日[土]　②5月21日[土]
　　①②とも 14:00–15:30 ◎13:45に現地集合
会場：吉祥寺東コミュニティーセンター(武蔵野市吉祥寺東町1-12-6)
定員：各回10名
申込：4月9日[土]10:00より電話にて受付(先着順)
　　電話 0422-22-0385

03　担当学芸員によるギャラリートーク

日時：①4月22日[金]18:30–19:10
　　②4月29日[金・祝]11:00–11:40
会場：吉祥寺美術館 企画展示室
定員：7名程度(予約不要、要入館)

左.《河霧む》1936年(武蔵野市蔵)
右上.《夏の川》1950年代頃(武蔵野市蔵)
右下.《等楊先聖》1928年(武蔵野市蔵)

武蔵野市立吉祥寺美術館
〒180-0004
東京都武蔵野市吉祥寺本町1-8-16 コピス吉祥寺A館7階
JR線・京王井の頭線 吉祥寺駅 北口より徒歩約3分
tel.0422-22-0385／fax.0422-22-0386

※美術館専用の駐車場はありません

◉新型コロナウイルス感染症感染予防のため、マスクの着用、検温、手指消毒、連絡先記入等にご協力ください
◉混雑時は人数制限をおこなう場合もあります